

## 10 世紀イベリア半島における写本挿絵の刷新と諸問題

毛塚実江子（共立女子大学非常勤講師）

報告では、比較的大きな刷新点が認められる 10 世紀にイベリア半島で制作されたキリスト教聖書関連写本挿絵を紹介し、それらの改変点から当時の写本制作の背景を推察した。

10 世紀のイベリア半島のキリスト教国で制作された写本は、福音書（現存しない）、典礼書関連書（礼拝定式書、応唱歌歌集）、詩篇、聖書のなかでも、ベアトゥス本と総称される黙示録註解写本群が多く現存する。刷新はそのベアトゥス本の一部系統において顕著であった。また、先行研究において解釈の難しい特徴的な挿絵が残る『960 年聖書』も紹介し、写本作成の意図と当時の時代背景と関連付けて自説を述べた。

まず、10 世紀イベリア半島の写本挿絵を概観し、美術史研究の先行研究を紹介すると、挿絵や図像の類似点での作品同士の影響関係が想定される。それらは古代ローマやササン朝ペルシア、西ゴート、メロヴィング朝、カロリング朝の伝統的なモチーフ、さらに同時代のビザンティン、アル・アンダルスなど多様である。とくにアル・アンダルスとは緊張関係にありながら、細部の装飾や楽人などのモチーフを共有していた。具体的には西ゴート時代からの伝統的な図像や（獅子の穴のダニエル、十字架、線描中心の人体表現などの表現言語が残存し、さらにメロヴィング朝にさかのぼる動物によるイニシャル装飾や文字彩色、大陸に持ち込まれた島嶼写本の装飾文様やカロリング朝一巻本聖書などからの神学的な影響も示唆された。これらの部分的なモチーフに加え、本文を説明した挿絵は見開きページ、あるいは全ページ大の大きさに描かれるようになり、黙示録以外の主題も積極的に取り入れられるようになった。ベアトゥス本の代表的な作例であるモーガン写本（ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館、Ms. 644）では、原色を多用した背景に二次元的な人物が大胆な構図で描かれているが、黙示録とその註解に加え、ヒエロニムスによるダニエル書註解とその挿絵が加えられた。また一部のベアトゥス本にはキリスト伝や「キリストの系図」が加えられ、福音書写本のように福音書記者の肖像やそのシンボルがアーチを模した枠内に配されるなどの多様な変化が見られた。

これらの変化は報告者が研究する『960 年聖書』（サン・イシドーロ王立参事会聖堂 Cod.2）と合わせて考察した際に、より明確な傾向がうかがえる。同聖書は、先行研究では特徴的で解釈が難しい挿絵が何点か含まれている。それらは、比較しうる類例がないため看過されてきたが、たとえば新約聖書のパウロ書簡に付されたパウロの肖像群など、聖書全体の構成を支える解釈が可能である。

パウロの肖像には同書簡（1 コリ 10：16）に由来する「賛美の杯」を掲げる動作があり、この動作は、写本の最終ページの向かい合う制作者像（f.514）においても、「書誌目録」（f.4v）一覧表の一对の人物や幕屋の傍らの人物（f.50）においても繰り返される。それらはパウロの神学やベアトゥスの著作において、対応関係が盛んに論じられた旧約聖書と新約聖書の一致を視覚的に結びつけているとも解釈しうるものである。さらに同写本に付された「書

誌目録」の一覧には収録されている旧約、新約の全書のタイトルが並べられ、旧新七十二書を完全な書として称揚するイシドルスの言葉が引用されている。同写本ではパウロ書簡の配置が使徒行伝よりも先に福音書に次いで配され、パウロの肖像とモーセとの図像学的な類似が一部見られる。これらのパウロ、モーセを対照的に表現した作例はカロリング朝の一卷本聖書に先例があり、装飾文様等と同じように神学的な背景が影響を受けた可能性もあるだろう。いずれにしても、同写本には、性質上、旧約聖書と新約聖書の関連性の重視という視点で構成が工夫された可能性が指摘される。そしてこのような思想の解釈が成立する当時のキリスト教的歴史観は、ベアトゥス本に旧約聖書のダニエル書註解や福音書が挿入された事実、そして『960年聖書』という大型の聖書写本が作成された思想的な背景となつたと推測できるだろう。